

コロナ禍と町の記憶・人の記憶

大木透『名匠 松本喜三郎』で歩く

竹原 明理

はじめに

新型コロナが大流行する直前の2019年、旧制熊本中学校で美術教員を勤めた甲斐青萍（1882～1974）という日本画家が記憶を元に描いた熊本城下町の図（以下、記憶を頼りに描かれた地図を本稿では「記憶地図」と記しておく）を調べる機会があった。江戸時代、加藤家・細川家による統治の下、熊本城下町が形成された。明治10年（1877）の西南戦争で壊滅的な被害を受けたが、熊本城域を陸軍が整備し熊本市街地にも軍の施設が出来るなど、熊本の町は軍都として発展した。昭和20年（1945）7月の熊本大空襲で再び大きな被害を受け、戦後復興を経た昭和28年（1953）には水害（6.26水害）に見舞われた。戦災や災害からの復興を重ねながら、現在の町は形成されてきた。

青萍は晩年を東京で過ごしたが、自身が長く過ごした往時の故郷の様子を鳥瞰的な記憶地図に残した。記憶には往々にして不正確な部分があるが、当時の地図や資料などと照らし合わせても、青萍の記憶地図はかなり正確なものであったし、地図からは読み取れないさまざまな情報が含まれていると感じた⁽¹⁾。この経験から、往時の熊本城下の様子をもっと調べてみたいと思うよ

うになった。折しも、『熊本日日新聞』紙上で「古地図で歩く城下町くまもと」が連載されるなど、平成28年（2016）熊本地震からの災害復旧と再開発が進み、町の景色が急激に変わる中、そういう機運も高まりつつあった。

そこに来てのコロナ禍である。不要不急や自肅の下に、従来とは異なった行動や生活が求められた。熊本の繁華街でも飲食店や衣料品店の閉店や移転が相次ぎ、中心市街地の空洞化を懸念するニュースも伝えられた⁽²⁾。その後、空いた物件に新しく開業した店舗が増え、初めて見る店も多くなった⁽³⁾。不要不急や自肅は、人間の生活や行動様式を変えるだけでなく、その町の様相さえ変えてしまうのだと感じた。

2年余り続くコロナ禍の間に、本棚に入れたままだった大木透『名匠 松本喜三郎』（1961年）を再び読む機会があった。改めて読むと、生人形師・松本喜三郎（1825～91）が過ごした幕末・明治の熊本城下町の様子が細かに記されており、学生時代に読んだ時よりも臨場感があった。一方で、同書に記された町の様子は、現在からはかなり想像しづらいものとなっているとも感じた。現在はマンションやオフィスビル、駐車場、空地が目立つからだ。熊本地震とコ

コロナ禍を経て、その置き換えのスピードは早くなっている。

前置きが長くなったが、この小文では『名匠 松本喜三郎』に記された熊本での喜三郎の足跡の一部を、現在の様子と照らし合わせながら備忘録的に歩いてみたい。

1. 大木透『名匠 松本喜三郎』について

当初私家版として限定200部刊行された大木透(1887～1959)の『名匠 松本喜三郎』は、平成16年(2004)に開催された熊本市現代美術館の展覧会『反近代の逆襲－生人形と松本喜三郎－』に合わせて復刻された。

著者の大木は佐賀市出身で、明治40年(1907)に熊本中学校を卒業後、新聞記者として活動した。「山帰来」と号し、野球、茶道、華道などにも通じた文化人であった。同書は、昭和9年(1934)に『九州日日新聞』(現在の『熊本日日新聞』)に25回にわたって連載された喜三郎の一代記に加筆修正し、昭和27年(1952)に書き上げられたものである。しかし、著者存命中は刊行に至らず、著者の死後10年近くが経過した頃、喜三郎の遺族やNHK熊本放送局の今西菊松(1913～87)の校訂を経て刊行された。

同書の「自序」の中で、大木は自身が7歳の時に『西国三十三所観世音霊験記』の興行を熊本で見て喜三郎の名を知ったこと、高村光雲の懐古談などを参照しつつ、喜三郎の遺族や門人となった江島栄次郎らから聞き取りをするなどして同書を編んだと記している。昭和初期であれば、喜三郎

の没後40余年。その足跡を直接知る証言者がかろうじて存命の頃であったろう。大木の取材から90年近くが経った現在、世代交代が進み、大木がいかにか貴重な証言を記録していたかがわかる。同書には、連載終了後から完成までに20年近くを要したためか、町の様子などについての補注も多い。それらを参照しつつ、コロナ禍の熊本の町を歩いてみよう。

2. 井手ノ口町～迎町周辺

喜三郎は文政8年(1825)、「井手ノ口町」で生まれた。父母、姉、妹2人(うち1人は早世)という家族構成であった。生家周辺について大木は次のように記す。

喜三郎の生家は井手ノ口町中程の南側に現存する福田衣裳店の個所に在ったが、明治十五、六年ごろ、荒れた旧宅を改築して妹お久仁に与え、お久仁の歿後、甥の七兵衛がこれを受けて住み、次で姻戚の松本源八という人が永らくここで米穀商を営んでいた。その後また代がかわつたところを戦災で焼かれてしまい、戦後新築が出来て福田商店の出現となったものである。焼失前にはその南隣りに玉城屋の宏大な店舗があつた。⁽⁴⁾

北側の河原町から長六橋を南に渡ってすぐ東側の本荘方面へ左折した白川沿いの一帯がかつての井手ノ口町である。対岸の河原町の川岸は下河原と呼ばれ、明治期には見世物や芝居などの興行が行われ歓楽地となった。現在は白川の河川改修工事により

【写真1】 井手ノ口町跡から長六橋、河原町方面を見る



両岸とも遊歩道となっている【写真1】。井手ノ口町は紺屋新今町の通りに接していた。現在、この通りは北側に白川沿いに築かれた堤防壁、南側に駐車場やマンション、一軒家などが並び、かつての面影はない【写真2】。長六橋の南側は、現在五叉路の迎町交差点になっている【写真3】。東側に本荘、西側から南側に迎町が広がる。

なお、長六橋とは、慶長六年（1601）に熊本城築城に際して架けられた橋で、白川に最初に架設された橋と伝わる。白川を挟んで北側の河原町と南側の迎町とを結び、熊本城下町と郊外を結ぶ交通の要所であった。現在は、西側の泰平橋と東側の代継橋の間に架かる。水害で明治29年（1896）と大正12年（1923）に架け替えられ、昭和2年（1927）に当時としては先進的な大型鉄橋となり、川尻と河原町を結ぶ川尻電車も開通した⁽⁵⁾。平成3年（1991）にコンクリート橋に架け替わり、中心市街地と郊外を結ぶ主要路国道3号線の一部となっている【写真4】。

近年刊行された津島為三郎氏（1925年生。迎町出身）の自叙伝『わが道の跡Ⅰ 人生一路 ルーツを辿る』および『わが道の跡

【写真2】 紺屋新今町の通りから西側を見る



【写真3】 長六橋南出口に広がる五叉路の迎町交差点



【写真4】 西側から長六橋、河原町方面を見る



Ⅱ 今は昔の物語り 運と心と人生』（熊日出版、2020年）には、戦前の迎町一帯の様子が記憶地図と文章で語られている。迎町一帯は、喜三郎やその好敵手とされる初代安本亀八（1826～1900）を輩出した地

域として知られてきたが、戦後の大規模な区画整理で町の様相が大きく変化し、それ以前の様子を語る資料はほとんど確認できない。そのため、津島氏の記憶地図は往時の迎町の様子を知る上で非常に貴重である。

津島氏の記憶地図によれば、昭和5～10年(1930～1935)頃、井手ノ口町には大木が記した「福田商店」の関係と思われる「福田質屋」のほか、造幣局、フスマ屋、カマボコ屋、地蔵サンなどが並び、道向かいには玉城醤油屋の土蔵があったという。紺屋新今町の通りは「柳ノ木があって淋しい」とのメモ書きもある⁽⁶⁾。福田商店については大木の記述と時期の齟齬があり、今後の検討を要する。津島氏からは、玉城屋は広大な敷地に庭が広がり、石灯籠が並んでいたという話も聞くことができた⁽⁷⁾。周辺を歩いてみると、かつて玉城屋の敷地の一部であった場所に昭和28年(1953)の6.26水害で被害を受けた石造の地蔵尊像が移築され、その経緯を刻んだ石碑が建つ。これがかつて井手ノ口町にあった「地蔵サン」である。

さらに津島氏の記憶地図を見てみると、長六橋を渡ってすぐ西側にスズラン灯のある迎大工町の商店街、さらにもう一つ本山方面へ西側に行くと迎大工町と並行する形で迎宝町の通りがあり、商店が立ち並んでいた様子がわかる⁽⁸⁾。昭和11年(1936)、迎宝町と迎大工町の南北を分断して軍用道路(現在の県道22号線。産業道路)が開通した。軍用道路はかつて未舗装で、ほこりがひどかったらしい。現在も迎大工町と

迎宝町の通りは一部が残るが、長六橋から延びる国道3号線が迎町一帯を東西に大きく分断する形で通り、マンションが立ち並ぶなどかつての商店街は姿を消している。

3. 迎町と地蔵祭り

毎年7月24日に「地蔵祭り」がある。かつて喜三郎や亀八が造り物の腕を競ったと伝えられる。白川沿いから迎町一帯にかけて多くの地蔵堂があったことが津島氏の記憶地図にも記され、現在もいくつかを確認できる【写真5】。大木は地蔵祭りについて次のように記している。



【写真5】 かつての迎宝町の入口付近に立つ地蔵堂

七月二十四日は地蔵祭である。熊本では祭りの数日前から、地蔵堂のある町々の子供たちが、口を揃えて一斉に「オトウミヨセン」と吐鳴りながら、戸別訪問でお燈明銭の喜捨を受け、貰いためた鳥目が祭りの費用に充てられる。(中略) 中でも長六橋以南の迎町と井手ノ口とは造り物の本場とされ、其夜の長六橋は人波打つて、なかなか通れなかつたとの古い言い伝えがあ

る。その時代、井手ノ口の松本喜三郎と迎町の安本亀八とは、造り物の人形で人気の中心であつた。⁽⁹⁾

現在では迎町一帯の地蔵祭りは衰退し、往時のような造り物の競技会は行われていない。地蔵祭りは町を挙げての一大イベントであり、津島氏も父が造り物の制作に参加し、飾りに使用した毛布などが家に残っていたと記憶している⁽¹⁰⁾。

かつて繁華街の下通商店街にあった大洋デパート（1952年創業）では、昭和30年代に「造り物競作展」と銘打って、熊本県内のさまざまな地域から出品された造り物の品評会が行われていた⁽¹¹⁾。大会のアルバムを見ると、高森町や宇土市など現在も祭礼に造り物が残る地域に加え、迎町や河原町、段山町、城南町など現在では造り物が出なくなった地域もこの頃までは制作していたことがわかる。

4. 米屋町付近

大木によると、喜三郎の父・半兵衛は「算勘に明るく、米屋町四ツ角の両替屋で油屋の友枝家に通い番頭を勤めていた時節もあつた」⁽¹²⁾という。友枝家は、熊本から出た能役者の家として知られる。もとは祇園社（現在の北岡神社）の舞楽座の一つであったとされるが、江戸時代は藩お抱えの能役者である一方、「油屋」を号した商人の家でもあつた。

米屋町四ツ角というのは一丁目と二丁目の角合せのところで、昔この辺りは目貫の商店街であつた。一丁目尻の

東角は半兵衛の主家で油屋友枝家の両替屋（中略）この四ツ角は米屋町四ツ角の通り名で評判され、また肥後の四ツ角とも云つて奥に自慢の一つになつていた。現時この四ツ角は市電敷設のために街路が広まり、四家の敷地もだいたいぶん削り取られている。⁽¹³⁾

今、この四つ角を歩いてみる。南側の白川方面へ進むと泰平橋が架かる。四つ角は、市電通りを挟んで北側に熊本市西消防署とその向かいにマンションが建ち、南側にカリーノMSビル（旧住友銀行熊本支店）⁽¹⁴⁾とその向かいに駐車場という様子になっている【写真6】。市電通りを含むこの一帯もマンションが立ち並び、往時の様子を想像するのは難しい。

喜三郎は明治14年（1881）に帰郷すると生まれ育った川向こうの井手ノ口町ではなく、旧城下町に含まれる米屋町2丁目に



【写真6】現在の米屋町四ツ角（北西側を見る）

住んだという。その後明治20年（1887）頃には同町1丁目に移った。当時の喜三郎の様子を知る人物に大木は話を聞いている。

明治二十年時代の喜三郎を米屋町二丁目の旧居で身近に見知った人がいる。其人は紺屋町二丁目に肥後蕎麦の元祖の老舗を今日まで持続している大石宗吉氏である。大石蕎麦屋と喜三郎の旧居とは裏つゞきになつていて、双方から行つたり来たりができていた。(中略) 米屋町二丁目の旧居はその後潰れて九曜正宗の西岡寿一郎商店となり、西岡商店の退転後、今日では横溝倉庫となつている。新居は米屋町一丁目の東側で、家並が昔と変わつているが、熊本県食糧公団本部の北どなりにあつた。⁽¹⁵⁾

宗吉は最後の店主を勤めた9代目(故・大石桂二氏)の祖父にあたるという⁽¹⁶⁾。大石蕎麦は2010年頃に閉業したが、往時の面影を残す住居兼店舗は現在も同地に残る。紺屋今町に面する表口から西に長く伸びる町屋で、裏側は間に幼稚園を挟んで米屋町2丁目の通りを表口とするマンションに接する。現在マンションになっているこの場所に、かつて喜三郎の住居もあつたと思われる。その後喜三郎が移つたという米屋町1丁目には、建て替わつてはいるものの熊本県の食糧会館があり、その北隣は駐車場となっている。この付近に喜三郎の引越し先があつたのだろう。地図で見るとかなり近距離での引越しだつたとわかる。

おわりに

駆け足ではあつたが、大木透『名匠 松

本喜三郎』に記された喜三郎の熊本での足跡の一部を、現在の町の様子と照らし合わせながら少しだけなぞってみた。今回紹介したのは、大木が取材した喜三郎の足跡のほんの一部に過ぎない。「生人形師・松本喜三郎」の人物像については、同書を参照されたい。今回歩いていない場所も多くあり、大木の記述を手がかりに今後も喜三郎の足跡をたどる作業を細々と継続したいと思っている。

大木の記述をもとに改めて現在の町を歩いてみると、ほとんどがマンションや駐車場になっていることがわかる。区画整理や開発が進む中、かろうじて残っていた町屋の多くは平成28年(2016)の熊本地震によりさらに減少した。そして、コロナ禍によりまたもや町の姿は変わりつつある。

大木は補注を入れてまで、喜三郎が過ごした町の様子を同時代の情報と併せて記述した。戦前の取材から時が経ち、戦後復興が進んでいたからであろう。推測に過ぎないが、町が変化し、世代交代も進み、喜三郎の足跡が分からなくなっていくことに大木は危機感を抱いていたのかもしれない。少なくとも大木の取材から90年近くが経過した今、大木が収集した喜三郎の足跡はより見えづらいものとなっていることがわかつた。今回改めて歩いてみて、土地に記憶を留め続けるのは意外と難しいのだと感じた。「文学散歩」や「歴史ウォーク」の真似事のような拙い町歩きではあつたが、生人形についてさまざまな研究がある一方、喜三郎が過ごした場所をたどる作業は意外と明文化されておらず、この真似事も

現状を記録する上で無意味ではないのかも
しれない。

最後に、甲斐青萍や津島氏が往時の故郷
の様子を記憶地図に残したことは、後世の
人間にとって大変幸運なことだと思う。検
証作業を要するにしても、古地図や古写真
には写らない情報がそれぞれの人の記憶の
中にはある。その情報は、たいてい記憶地
図として残らないことのほうが多い。人と
の接触が、一定の強制力を持って制限され
るようになってから久しい。「もう〇〇年
早かったら知っとる人がおったんやけど」
という言葉を書く度に、人の記憶を引き出
し、記録していく作業は一律に不要不急で
自粛すべきものではないと改めて感じてい
る。

注

- (1) 詳細は、伊藤重剛『甲斐青萍熊本町並画集江戸・明治・大正・昭和』（熊本に地に新聞社、2017年）および展覧会図録『追憶の熊本～日本画家・甲斐青萍が描いた熊本城下の図録』（熊本博物館、2019年）参照。
- (2) 『熊本日日新聞』（2021年11月3日付）。
- (3) 『熊本日日新聞』（2021年12月29日付）。
- (4) 大木透『名匠 松本喜三郎』（復刻版、熊本市現代美術館、2004年）23～24頁。
- (5) 熊本日日新聞社ほか編『熊本県大百科事典』（熊本日日新聞社、1982年）561頁。
- (6) 津島為三郎『わが道の跡Ⅱ 今は昔の語り 運と心と人生』（熊日出版、2020年）58～59頁。
- (7) 令和3年（2021）11月30日聞き取り。
- (8) 註6に同じ。
- (9) 註4掲載書、29～30頁。
- (10) 註6掲載書、11頁
- (11) 令和3年（2021）8月19日に実施した高森町商工会議書での資料調査にて実見。
- (12) 註4掲載書、24頁
- (13) 同前。
- (14) 昭和9年（1934）に建てられた同ビルは、令和2年（2020）に熊本市の歴史的風致形成建造物に指定された。
- (15) 註4掲載書、160～161頁。
- (16) 令和3年（2021）12月5日聞き取り。同建造物も熊本市の歴史的風致形成建造物に指定されている。

（たけはら あかり 熊本博物館学芸員）